

I 保育を見直すはじめの一步

○子どもを見て保育する

⇒行き場を失っている子どもがいないか。

⇒子どもがひとり（独り）になっていないか。

・ ・ 「子どもをひとり（独り）にしない」というコンセプト

○子どもの「心の動き」が見えているだろうか

⇒「できるーできない」は、心の動きのごく一部にすぎない。

⇒「流れ」ができているか、「モノ」とつながっているか。

★子どもを「点」でなく、「線」でみる。

○「着地」という考え方

⇒一日の生活（長い保育時間）に着地できているか。

⇒帰ってから、家族に話したくなる活動があるか（話している？）。

II 生活の保障と学びの保障

「流れ」をつくる

- 流れとは、「これをしたら、次はこれ」という展開のこと
 - ⇒自発的に動けない子どもは、その子のなかに「流れ」ができていない。
 - ・それは、必ずしも、保育者が考える流れとは合致しない。
 - ⇒「これ」にあたるものが、定着していない子どもがいる。
- 流れがあると
 - ⇒子どもは、自発的に動ける。
 - ⇒子どもに混乱が生じたとき、戻れるところができる。
 - ・ 戻る先として、子どものなかに流れをつくってあげたい。

○「流れ」をつくるポイント

⇒子どもが動きやすい動線をつくる。

⇒「これをしたら、次はこれ」の、「これ」を定着させる。

- ・活動ごとに、「区切り」=おしまいを明らかにする。
- ・区切りをつけるとは、活動をじょうずに終わらせることでもある。

⇒できるところから、小さな流れをつくる。

「モノ」 (教材・活動) とつなぐ

「モノ」 (教材・活動) とつなぐ

○モノとつなぐための手立てを考える。

⇒基本は、三項関係。

・ ・ つなぐには、**人の介在が必要である。**

○園全体で取り組む

⇒コーナー遊びに、子どもがつながっているだろうか。

⇒宙づりになっている子どもは、人（保育者）の介在がないと遊びにつながらない。

⇒コーナーに人を配置するとなると、クラスの単位を超えた職員の連携が欠かせない。

⇒園庭に、「**子どもが集まる場所**」をつくる。

「同時に見る」

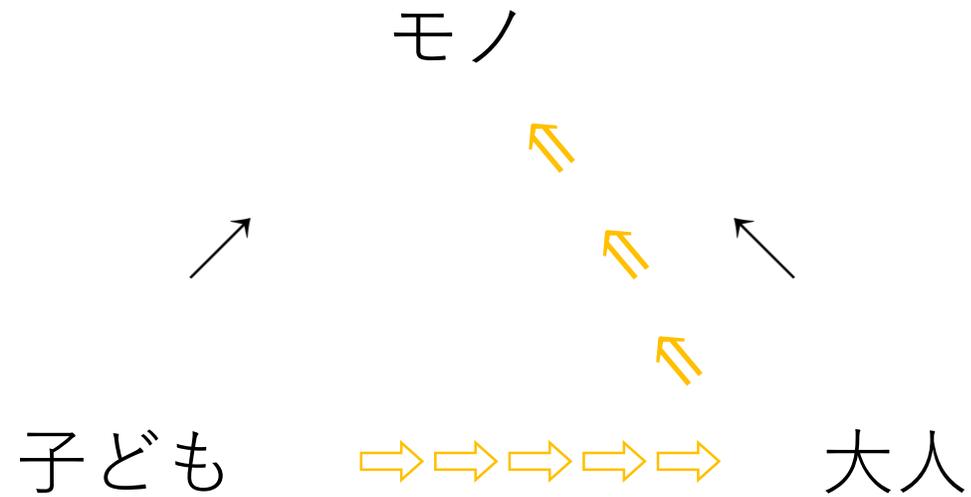
モノ



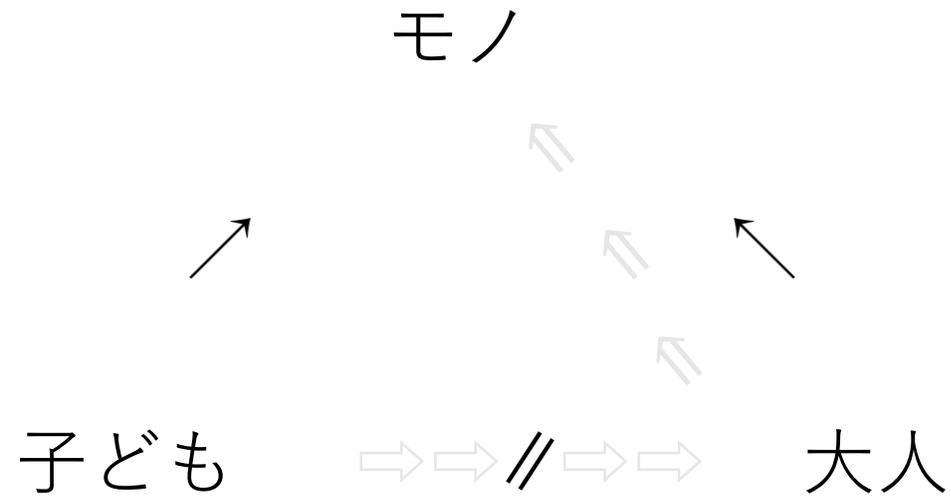
子ども

大人

「一緒に見る」 = 三項関係の成立



大人の振るまいを見ない
= 三項関係の不成立



○愛着関係が問題になるときに

⇒「一緒に佇む」というモードがある。

⇒一緒に佇んで、モノを共有し、感情を交流する。

○子どもがつかぬがるモノを工夫する

⇒一人ひとりの子どもの顔を浮かべてモノをつくる（提供する）。

Ⅲ 「協同的な学び」の考え方 (学びとケア)

学び

○子ども同士のかかわり

⇒かかわりが薄くないだろうか。

- ・ ・ 困っている仲間がいても、気にならない？
- ・ ・ 困っていても、仲間に助けが求められない
(尋ねられない)？

⇒保育者から子どもへのかかわりが薄いのかももしれない

- ・ ・ 保育者が、かかわりのモデルになっていない？

○振り返り場面

⇒振り返りとは、「楽しいことを思い出してもう一度楽しくなる」こと。

⇒「次を楽しみにする＝期待する（またしたいという）心を育てる」こと。

○「聴き合うクラス」をつくる

⇒いくつかの技術＝「一往復半の技術」。

⇒「きくーつなぐー戻す」。

⇒語る（お話しする）ことで自分の考えはできる

・ ・ 「**できたてほやほやの言葉**」を語らせる。

○「学び」を充実させるために

⇒背伸びが必要な題材（ものづくりや科学にかかわる題材など）を用意する。

ケア

- ケアのないところにインクルージョンはない
 - ⇒「保育のなかでのケア」を充実させる。
 - ⇒ケアとは、子どもの弱さを肯定も否定もせずに引き受けること。
 - ⇒「合理的配慮」と「マイクロ・カインドネス」。
- 毎日、長い時間、たくさんの子どもを集団で預かる保育をデザインする
 - ⇒その制約を取り沙汰するのではなく、そのよさを生かした保育づくりをする。
 - ⇒毎日の繰り返し（**反復**）によってできることがたくさんある。
 - ⇒時間をかけて築かれてきた保育の専門性。

- 人（保育者）の存在が子どもの育ちを妨げないように
 - ⇒不要な声かけを減らす。
 - ・・声かけが多いと、子どもとの関係が崩れる。
 - ⇒人には、侵襲性がある（ロボットにそれはない）。

IV 固定観念から自由になる

○スケジュールとは何？

⇒楽しいことの「お知らせ」。

○初めてのこと（行事など）が苦手？

⇒いつもと違う動きをする保育者が、子どもを不安にさせているかもしれない。

○ルール・約束とは何か？

⇒大人の都合で決めているルールが多い。

⇒相手がいるからこそそのルール。

⇒大人が約束を守るモデルを示す。

○がまんは必要？

⇒原則、がまんはさせないほうがいい。

⇒強いて言えば、「ちょっとがまんしたらいいことがあった」という経験をさせる。

○切り替えができない？

⇒切り替えとは、終わる練習。

⇒気がすむまで遊ばせて終わりを経験させる。

・片付け=今していることを終わる練習。

○相手の気持ちがわからない？

⇒自分の気持ちもわかっていない（表出できていない）かもしれない。

⇒人の気持ちは、人と人とのあいだでつくられる。

○障がいとは何か？

⇒欠損モデル（欠けていることを補うという考え方）から抜け出す。

⇒「やりくり」をする子どもたち。

保護者支援の心得 語り出すことは傷つくこと

1) 思いあがり？

保護者になんでも話してほしいと思うのは、保育者や教師の思いあがりかもしれない。

ふつうの人づきあいを考えたとき、だれそれかまわず、他人になんでも話すということはありませんから。

問題が深刻であればあるほど、そう簡単に語り出せないのは、むしろ自然なことである。

2) 相手を選ぶ

そのことをわきまえた上でなお、私たちは、「語り出すことは傷つくことである」という言葉に注目したいと思う。

ひとりでは抱えきれない出来事があつて、誰かに話を聴いてもらいたくなることがある。

そんなとき、たいていの人は自分の話を受け止めてもらえそうな人を探す。

意を決して語り出してはみたものの、「それは、あなたが悪いのでしょう」と、すべてを否定されてしまったら、「こんな人に話さなければよかった」と後悔することだろう。

「でもね・・・」と、話を途中で遮る人も、話し相手としては不向きである。

こういう人には、いくら話しても「かみあわない不全感」が残るだけで、自分の気持ちをわかってもらったという実感が得られないのである。

それどころか、語れば語るほど、自分が傷つく。

傷つきたくなかったら、黙っておいた方が無難である。

3) 語り出しても傷つかなくてすむ人になる

人に話していやな思いをしてきた人は、どうしても用心深くなる。

よほど相手を選ばなければ、語り出せないのである。

しかし、園や学校に子どもを通わせる保護者の立場では、相手を選べない。聞き手は、かならずしも自分が選んだわけではない担任や管理職である。

うっかり話して自分が傷つくことを恐れるのは、当然である。

保護者が沈黙するわけは、そこにある。

保護者に語ってもらいたければ、保育者や教師自身が、「語り出しても傷つかなくてすむ人」にならなくてはいけない。

「この人にだったら、話しても大丈夫かもしれない」と思ってもらえる人に私たちがなっているだろうか。

どうしたらそんな人になれるのだろうか。

人と人とのあいだでつくられる気持ち

おそらく保護者も、いまの自分の気持ちがどうであるか、よくわかっていないのだ。

自分では、自分の気持ちが意外とわからないものである。

自分で意識していなくても、相手に指摘してもらって気づく自分の気持ちというものがある。

わかっているけど、認めたくない気持ちもある。

抑圧されていて見えなくなっている気持ちもある。

- そんな感情を、否定せずに聴いてくれて、部分的にでも承認してくれる人がいてくれたとき、自分で受け入れられる自分の気持ちというものが再編される。
- 人としゃべっているうちに落ち着いてくるというのは、そのような事態を指しているのかもしれない。
- 人の気持ちは、人と人とのあいだでつくられる。

保護者支援は消極的行為

1) 自分のために仕事をしてはいけない

支援という営みは、本来、受動的、消極的な行為でなければいけない。

こちらから積極的にアプローチするのではなく、相手からの求めがあったときだけ動くのである。

そういうことでは、支援をする側の人というのは、とても幸せな立場にあるのだと思う。

自分が他者から求められている、必要とされているという感覚は、自らの存在をたしかなものにするからだ。

だからこそ、気をつけなくてはならないことがある。

それは、必要とされているという実感を、自ら取りに行こうとしてしまう危険である。

自分の存在を見いだしたいがために、人のお世話をしてしまうということがありうる、というよりよくあるのだ。

厳しい言い方になるが、支援という名を借りて、自分のために仕事をしていないだろうか。

保護者支援では、そういうことが起こりやすい気がする。

2) 頼まれないことはしない

そうならないように、ときどき、自分のしていることを振り返ってみよう。

チェックしたいことのひとつが、「頼まれないことはしない」という支援の原則である。

よかれと思うことでも、保護者が望まないことをすると、関係がぎくしゃくする。

頼まれないことはせずに、待とう。

保護者の気持ち揺らいでいるときに専門機関を勧めることは、けっして得策でない。

早期発見、早期療育がしきりに言われているが、一步まちがえるとそれは、「頼まれないこと」になる。

注意が必要である。

3) 求めない

もうひとつは、「求めない」という態度である。

保護者に向けて、子どもへのかかわり方をアドバイスすることがある。

うまくいきそうな手立ては、いくらでもある。

しかし、保護者ができるかどうかは、別問題である。

実際にするのは保護者であるということを、忘れてはいけない。

アドバイスをすることじたい、それを実行することを保護者に期待している。

つまり、気づかぬうちに、求めてしまっているのだ。

求めたことがうまく運ばないと、求められた方はもちろん、求めたほうもつらくなる。

人との関係を良好に保つためには、相手に必要以上のことを「求めない」ことが大切である。

安易なアドバイスは、保護者を追い詰めるだけである。

4) しかし、ひとりにしない

頼まれないことはしない、求めない。

それではいったい、私たちにできることがあるのだろうか。

それは、保護者を「ひとりにしない」ことだと思う。

保護者によっては、家庭のこと、自分自身の身の回りのことなど、かかえているものが多すぎて、いつ何をどう決めたらいいのか、あるいは決めないほうがいいのか、考えることさえできなくなっている人がいる。

どんな問題にも、状況が変化する分岐点のようなところがあるのだが、渦中にある保護者にしてみれば、やがて訪れる岐路のことなど信じられなくなっている。

文字通り、暗中模索である。

しかも、かかえているものが多い人ほど、自分だけでかかえている。そういうときに必要なのは、問題が動く分岐点まで、保護者を誘導してあげられる人である。

ちいさな出来事もいっしょに考えてあげながら、日々やりくりをしている保護者に寄り添うのである。

そうすると、ふとしたことから、当初は見えていなかった分岐点が現れてくる。

分岐点までたどり着くことができれば、進むべき道は、おのずと決まってくる。

迷いが残されていたなら、保護者が望んでいる方向へと後押ししてあげよう。

「それでいい」と言ってほしいときもあれば、反対に、「それは違うと思うよ」と否定してほしいときもある。

ひとりでないことがわかれば、あとは自分で歩んでいける。

